

39 明治維新開港当時関門跡

中央区元町通6-2

- ▶ 幕府が外国人居留地を設置した慶応3年(1867)、密貿易を防ぐために置いた関門14箇所うちのひとつで「西関門」と呼ばれたところです。
関門は明治4年(1871)に廃止され、自由に通行できるようになりました。



40

勝 海舟ゆかりの地

専 稱 寺

中央区南本町通4-5

- ▶ 専稱寺は江戸時代、大坂の北鍋屋町にあった浄土真宗の寺です。北鍋屋町は現在の大阪府中央区淡路町3丁目2-13、14に該当します。
勝 海舟は大坂での寓居先として専稱寺を使用していました。
以下、昨年のイベントテキストで紹介した文をそのまま引用します。

浄土真宗 専稱寺

順正寺の次の勝 海舟寓居先は、当時の北鍋屋町にあった「浄土真宗 専稱寺」です。北鍋屋町はその後の町名変更で、淡路町3丁目になり、区画整理などで更に変更し、現在の淡路町2丁目5~6、同3丁目1~2辺りが、北鍋屋町に該当します。
専稱寺があった場所の確証が取れる資料はなかったのですが、大阪市史を研究されているある先生に助言をいただいたところ、「北鍋屋町水帳」(安政3年作成)と「大阪地籍地図」(明治44年作成の大阪市地図)の2つの資料を照らして判断すると、現在の淡路町3丁目2-13(スワン大阪第一ビル)及び、2-14(ノリタケビル) 辺りだという結論に至りました。
「北鍋屋町水帳」は北鍋屋町にあった全ての建物の横幅・奥行き寸法、及び持ち主が記載されており、それらの建物一つ一つの寸法と地図を見比べますと、この場所だということになります。



勝 海舟寓居跡

「専稱寺」は、「東区史」において北鍋屋町にあったことが記載されています。また、専稱寺は神戸市葺合区吾妻町に移転したことも確認することができました。葺合区は今の神戸市中央区で、ちょうど葺合警察署がある付近となります。2002年2月、現在の専稱寺を訪れてみました。

ご住職さんの話によりますと、専稱寺と勝海舟は関連があり、それを裏付ける資料もかつては残っていました。その資料の中には、坂本龍馬が専稱寺でお世話になった記念に残した絵のようなものもあったようです。しかし、昭和20年の空襲による戦災で、貴重な資料は全て焼失してしまいました。

「専稱寺」は、浄土真宗本派本願寺門下で、慶長13年(1608)12月28日、祐性という僧が、北鍋屋町にて開山します。明治31年10月に、同じ大阪市内で旧東区中本大字森(現、中央区森之宮中央)に移転します。明治33年9月3日には、神戸市葺合区吾妻町(現、葺合警察署付近)に移転します。戦災により更に、現在の場所である中央区南本町通4丁目5に移転し、今日に至ります。勝海舟は文久3年3月より9月24日までの約半年間、大坂の寓居先である専稱寺にて海舟の私塾である海軍塾を開いていました。その後、神戸海軍操練所開設に向け、海軍塾も神戸へ移転しています。大坂海軍塾だった専稱寺の現在の場所と、神戸海軍操練所ならびに神戸海軍塾(勝塾)の跡地との距離が、目と鼻の先というのも不思議なものを感じます。



現在の専稱寺

<勝海舟・西郷吉之助の会見>

慶応4年(1868)3月13日・14日。江戸薩摩藩邸にて行われた幕府代表勝海舟と新政府代表薩摩藩西郷吉之助(後の隆盛)による江戸無血開城を決めた歴史的な会見は余りにも有名ですが、この両者が、元治元年(1864)9月11日に大坂で会見したことも有名です。「海舟日記」によると9月9日に『陸路大坂へ帰る。』とあり、神戸から陸路で大坂の旅宿である「専稱寺」に入りました。そして9月11日に『薩人 大島吉之助(西郷吉之助)、吉井中助(幸輔)、越人 青山小三郎、来訪。云々、征長の御議紛々、決せず、関東御混雑、実に策の行わるべき無し。邦人紛擾再生せんか。如何して可ならむやと云々。今、天下危急日々相迫り、一人も実意邦家に尽す者なし。上下大抵私營、小節、又、嫌忌を避くるのみ。かくの如くにて如何ぞ瓦解せざらん哉云々。』とあり、西郷吉之助が当時使用の「大島吉之助」という名で、勝海舟を訪ねた事が確認されます。「氷川清話」には『おれが初めて西郷に会ったのは「元治元年九月十一日」兵庫開港延期の談判委員を仰せつけられるために、おれが召されて京都に入る途中に、大阪の旅館であった。そのとき西郷はお留守居格だったが、くつわの紋のついた黒縮緬の羽織を着て、なかなか立派な風采だったよ。西郷は、兵庫開港延期のことを、よほど重大な問題だと思って、ずいぶん心配していたようだったが、しきりにおれにその処置法を聞かせよというわい。(途中省略)彼の問うに任せて、おれは幕府今日の事情をいっさい談じて聞かせた。(以下省略)』とあります。2回目の流刑を終えた薩摩藩の西郷吉之助は、元治元年(1864)3月から藩務に復帰し、藩命により上京します。西郷吉之助は事前に訪問希望を手紙に認め、勝海舟に了承を得た上で、同年9月11日、旅宿である専稱寺を訪れました。

「海舟日記」の9月11日に『豊後殿御旅館へ参上。聞く。京都にて薩藩より建議あり、その言は防長二州は半国を以て禁裡の御物成とし、半ば征討の諸侯へ下されべし。(以下省略)』とあり、勝海舟は豊後殿(老中 阿部豊後守正外)を訪ねています。西郷と勝は阿部正外の寓居先で会見した。ということも考えられなくもないのですが、西郷が事前に会う約束を取っていることから考えますと、老中の寓居先での会見を約束するとは考えられないので、その可能性は低いと思います。

西郷吉之助は、「蛤御門の変後の長州問題」「兵庫開港延期問題」を詰問するために訪問します。また更に、「長州の次の標的は薩摩ではないか」という幕府の腹を探るため、勝海舟を打ちたたたくつもりで乗り込んだようです。

この会見後、西郷は同藩の大久保一蔵に次のような手紙を送っています。

『勝氏へ初て面会仕り候処、実に驚き入り候ふ人物にて、最初打ち叩くつもりにて、差し越し候ところ、頓と頭を下げ申し候。どれだけか智略の有るやら知れぬ塩梅に見受け申し候。先ず英雄肌合いの人にて佐久間より事の出来候儀は一層も越し候はん。学問と見識におひては佐久間抜群の事に御座候得共、現時に臨み候ては此勝先生と、ひどくほれ申し候。』(この手紙は明治20年ごろ、吉井友実により発見)

また、「海舟余波」(巖本善治 編)では『西郷に初めて会見せられし時の事を聞きかけしにイヤ、大坂であったよ。一所に来たものは、ソウサ、誰であったか。一人ではなかった、忘れてしまった。(途中省略)何でも、大久保[利通]の方にあったそうナ。此方では、少しも知らなかったが、ソナ手紙があるということだ。』と記されています。
この会談は、お互いの人物の大きさを認め合い、「江戸城無血開城」という平和的解決を実現させるための大きな一因となるものでした。



勝海舟



西郷吉之助

41 加納宗七像

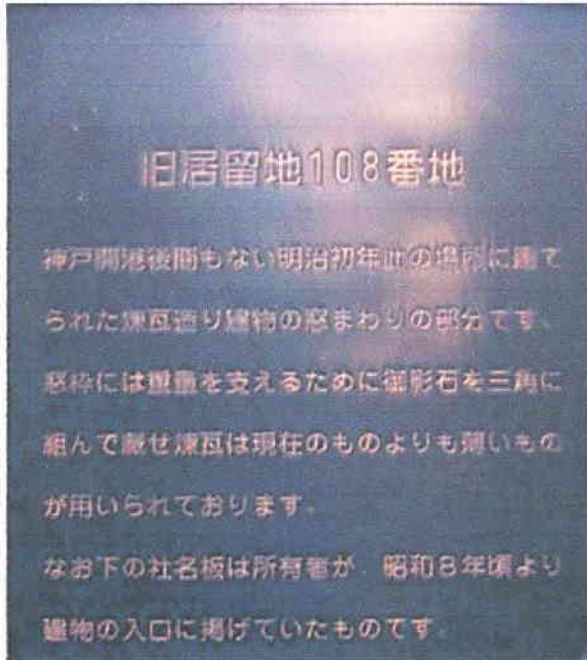
中央区加納町6(東遊園地)

- 文政10年(1827)、紀州藩の御用商人宮本助七の次男として生まれます。宗七は家業を手伝い、結婚後独立します。藩内では伊達宗興に引き立てられます。慶応3年(1867)11月、上京し伊達宗興の弟である陸奥源二郎(宗光)を訪ねます。直後、坂本龍馬が暗殺されます。宗七は龍馬暗殺の黒幕と噂された紀州藩 三浦休太郎の襲撃計画に加担し、12月7日天満屋事件にも加わりました。事件後は神戸に移住し、材木商を営みます。明治4年(1871)生田川の流路変更の改修工事を請け負い、旧生田川の川底を埋め立てる整備を行いました。その実績により開発された地域は「加納町」と名づけられ、現在に至っています。



42 旧居留地108番地の碑

中央区伊藤町



43 伊藤博文ゆかりの町 伊藤町

中央区伊藤町

- ▶ 長州藩出身の伊藤俊輔は、幕末期、同藩の井上聞多ら5名で英国密航留学をしたことがあります。その経験を生かして、兵庫開港直後に突発した神戸事件を解決に向けて奔走しました。その功により、兵庫県初代知事に就任します。俊輔はまだ27歳でした。外国人居留地にも尽力し、町の通りのひとつは「伊藤町」と命名されました。



明治元年頃の伊藤俊輔(後の博文)